



今月の御聖訓



Handwritten calligraphy of the Buddhist teaching text, written vertically in cursive style.

目連尊者が

法華経信まいらせし大善は、

我が身仏になるのみならず、父

母仏になり給う。上七代下七代、

上無量生下無量生の父母等

存外に仏となり給う

【「五箇盆御書」全集一四三〇頁】

目次

今月の御聖訓	
巻頭言	菅野憲道 1
お講話 法華経は色読が肝要なり	菅野憲道 2
ちょっと寄り道⑥〈ネット仲間〉	森田観道 8
天地つかの間〔その⑥〕	成田詳道 9
恵日だより	
《本堂修復記念法要並びに第二十五回源立寺法華講総会特集》	10
経過報告	新田清治 11
所感発表〔正信に生きる〕	平井勝男 13
講頭挨拶	尾林弘三 15
住職指導	菅野憲道 16
閉会の辞	福田一晃 19
読書案内	松田銘道 20
葉月詠草 8月の行事	

卷頭言

咸皆懷恋慕 而生渴仰心

菅野 憲道



歴史を通読すると、近世に入り、宗教が人々への影響力を失い、人間自身が神仏にとって変わってから、世界は急激に変化してきたようである。それは力への信仰である。

明治の日本の国家目標は、欧米列強の帝国主義に伍して、自らも強大な軍事大国化することで、植民地化の危機をきりぬけようとしたといわれる。なるほど、素人の目には強大な軍事力を持つことが、支配をまぬがれる唯一の方法のようにみえるのは確かである。そしてその事はある程度成功したかにみえたのであるが、結局その強大な軍事力ゆえに国民は敗戦という地獄の憂き目を味わったのである。そして最近も同じことが起こった。ソ連がその過剰な軍事力ゆえに崩壊してしまったのである。軍備という暴力でもって人々を永く支配し続けることが出来ないのは、歴史に明らかだったはずである。

戦後の日本は経済力や技術力で欧米との生存競争に打ち勝とうとしてきた。しかし、これらの競争に勝利を収めたはずの日本が、国際的には非常に困難な局面を迎えている。しかも日本という国はけして人間にやさしい、住みやすい、ゆとりのある社会にはほど遠い姿である。そのうえ他国からもあまり好かれない国民のようである。こうした事に気づいたためか、最近では文化という事が重視され、我が国が国際的に孤立しないよう、日本文化を積極的に海外に紹介したり、国際交流を盛んにしようという識者の声が強くなっている。いわゆるハードからソフトへの転換ということが時代の潮流なのだろう。

日本という国家が戦後五十年を経て、軍事力という暴力によるアジア支配から経済力や技術力によるゆるやかな進出に変わってきたのである。しかし、こうした武力や財力への信仰もそろそろ反省して、徳の力、法の力への信仰と変わって共存共栄をめざさなければ、本当の平和は訪れないし、人類の将来も危ういのではないだろうか。東洋には徳治政治という概念があったが、いまの日本こそ真っ先に国家エゴを捨て、国際社会にソフトの面で貢献できるような理念を求められている時代ではないかと思う。

法華経を信ずる者として、目先の皮相的な力よりは、現象の本質に流れる大きな因果の力を信じて、功を積み徳を累ねるべく精進したいものである。

お講講話 (要旨)

拝読御書

「国府尼御前御書」

(全集一三三四頁)

法華経は色読が肝要なり

菅野 憲 道

《仏教には依拠となる経典が不可欠》

相変わらずオウム関係の報道がマスコミを賑わせていますが、これらの報道を通じて思い知らされるのは、間違った宗教や思想の恐ろしさということです。マインド・コントロールされて、判断力を失い、妄想を信ずることの恐ろしさです。

宗教には、抛り所となる根本経典が必ず存在します。そしてその経典によって、目標と修行方法が説かれています。例えば、法華経では即身成仏を目指しますし、浄土経では極楽往生が説かれて、それらを目標に修行に励むという原則があります。

ところが、オウムはその抛り所となるべき経典というものがなく、話の中に仏教用語が出てきたかと思えば、次にはヒンズー教のシバ神が駆り出されたり、自らはキリストの再誕と称するなど、全てが思いつきでかき集めたような、ごちゃ混ぜの教義で、根本になる聖典などはありません。抛り所の根本聖典がないということとは、無原則のご都合主義ということ、出鱈目ということ、その一つにハルマゲドン等という思想があります。何やら今世紀末に世界最終戦争がおこり、人類は滅亡の危機に瀕するという終

末思想ですが、仏教とは全く無縁のものです。

仏教の経典には、むしろ

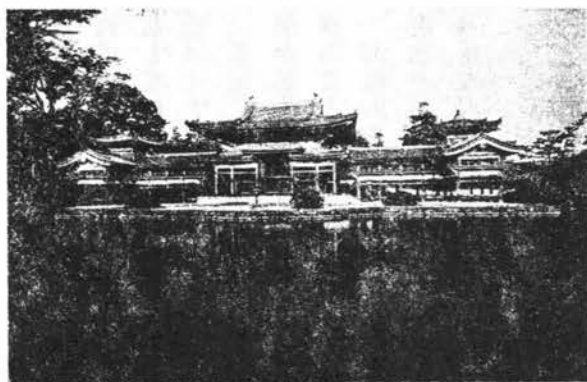
「末法になると、必ず仏様の名を語って、色々な外道が仏法を滅ぼす働きをする。これらの人は、髪の毛は長く、髭をのぼし放題、爪も長いだらしない姿で、これらは法滅の相を現ずるのである」(大集経)

と明確に説かれています。これに当てはまるのがオウムの教祖のようです。

《色相莊嚴の仏様と無作三身如来》

さて、宗教には二つの方向性がありまして、一つには日常の現実の苦しみや不安から逃れるために、天国とか極楽浄土という理想世界を説いて、現実の苦しみを癒すという方向です。これは五感(目・耳・鼻・舌・皮膚)の五つに訴えて理想世界を観相させて、そこに導くという宗教です。

たとえば真言密教などは、我々の視聴覚に訴える宗教で、まさに、今はやりのパーチャル・リアリティー(仮想現実)そのものといえます。高野山の堂塔伽藍などに入ってみますと、極彩色の



現実世界に別世界を見せようと試みた宇治平等院

想世界を現実化したものです。

このように、多くの宗教は、色相莊嚴（かなた）といって、人間の夢や理想を彼岸（かなた）の彼方に設けて、様々な方法でこの理想世界（浄土・天国）を実感させ、その世界にゆくことを神仏に希求させるものです。だからこうした方法がエスカレートすると、映像や薬物まで用いてこれらの幻覚症状によって特異体験をしようということにまでなってしまうのです。

一方、これらの五感を通じて理想世界を教える宗教に対して、一念を強調するのが法華経の教えです。法華経に入りますと、そういう仮想世界は否定され、娑婆即寂光（しやば即じやくかう）といって、何に苦しみや不浄なもので満ちている現実世界でも、この現実を離れて我々の住む世界は無く、この現実を浄化することこそ仏の本意であると説かれます。

曼荼羅の空間が広がります。そこには大日如来を中心にした仏菩薩が、天井や壁・柱にまできらびやかに描かれていきます。また、声（しやう）・明（みやう）や詠歌（えいか）、鐘や楽器で音楽を奏で、護摩（ごま）を焚いたり焼香・塗香（ぬかう）などのかおり等。目、耳、鼻等の感覚に訴えて人々を幻想の世界へ導こうというものです。

また、宇治の平等院や平泉の中尊寺の金色堂などの建物は、現世に極楽浄土という仮

法華経以前の仏様は、三十二相八十種好（さんじふにさうはちじゆうこう）といって、我々には無い能力を備えて、見るからにすばらしい感嘆すべき姿をお持ちになられています。人間の理想とする人格像を、全部備えたのが仏様であるからです。しかし、法華経に來れば、これらの仏は全て色相莊嚴（しやくさうさうげん）といって、作られた仮の仏であると説かれ、それらは法華経によって本仏があかさされるまでの方便経の仏であって、現実の存在ではないんだと否定されるのです。そして、本当の仏様は、つくるわず、はたらかず、ありのままの無作の三身（さんじん）（法身・報身・応身）として、あらゆる存在に内在しておいでになる、と説かれるのです。だから法華経の本仏は特別に超人的な絶対神のようなものでなく、ただの当たり前の人、平凡人の姿で法華経を行ずる人の内証（ないしやう）に存在するのであります。

爾前経に説かれるような極楽の世界も、我々が目や耳や舌等の五感によって、感覚的にとらえたとしても、それはすべて夢幻であって、永遠に壊れない本當の理想ではないのです。

では、本當の理想はどこにあるのかということですが、それについては、本當の理想世界、衆生所遊樂の世界は、けして向こうからのみもたらされるものではない、主因は自らにあるんだということです。いかなる性質のものを理想とし、悦び楽しみと感ずるかは、きわめてその人の命におうところが大でありますから、自分の命そのものを覚えていかなければ得られないと説かれるのです。これが法華経に來て、始めて説き明かされる一念三千の法門（ぽうもん）なのです。

大聖人様の仏法は、自分とその所住の場を離れて作られた幻想に逃避することではありません。ある人にとっては単調で退屈な、またある人にとって欺瞞（ごまか）と不正に満ちた、またある人にとって苦

しみと不安に満ちた、またある人にとって誘惑や刺激に満ちた世界でも、いかに愚かで非力な自分でも、その現実には立ち向って、法華経を杖とも柱ともたのんで受持していくならば、その身その場において、真の苦を苦と悟り、真の楽を楽と開いて、我が身に真実と智恵と慈悲を実現できるのであると教えられているのです。

《白蓮華は仏様の悟りの象徴》

そこを妙法蓮華経の蓮華に譬えられるのです。蓮華は常に泥の中にありながら、しかもその泥の中から一点の曇りもない白蓮華の花を咲かせるのですが、その姿の中に仏様の究極の悟りを象徴せしめているのです。



正しい宗教というものは厳しい現実から逃れるとか、現実を忘れて快楽にひたるといったものではなく、自身の現実を正面から直視して如何に自身の生き方を改革していくかということであると思います。

本宗には、三衣さんねというものがあります。この三衣とは、我々僧侶が仏法を修行する上において、基本の資具となる袈裟と衣と数珠のことです。

薄墨の衣の上に白い袈裟を着けますが、その意味は薄墨の衣は泥水を表わしており、泥水の中に清らかな白蓮華が咲くことを意味して薄墨の衣の上に白い袈裟着けるのです。すなわち世間の中にあつて世間法に染まらずに、仏法の精神を持っていく姿を意味しています。在家の皆さんは袈裟・衣こそ着ませんが白房の数珠

を持って信心しております。これは常に心に白い袈裟を着けていることを意味しますから、それを忘れてはいけません。

また、知らないで赤とか茶色の房の数珠を使う人がたまにありますが、これは信心が違っていますから、必ず白い房の数珠を使わなければなりません。「数珠の一つくらい何色でもかまうもんか」などと思うならば、そこから世間法にすっかり染まり、謗法の風がしのび寄り、正しい信心から遠ざかってしまいかねません。

世間から離れて閉鎖的になり、頑かた々な自分だけの信心の世界に閉じ込められてしまうのも困りものですが、そうかといって無原則に世間に流されるのも不幸です。無信心の人や信心反対の人、また、色々な価値観を持っている世間の人々の中にあつて、仏法の精神をいささかも失わないで自行化他に励むところに法華経の尊い修行のあり方があります。

《法華経の行者ということ》

法華経には、法師品を始め、いたるところで末法の世においては仏を供養するよりも法華経の行者を供養する大切さが説かれています。法華経の行者を供養する功德は積尊（完全無欠の仏様）を供養するよりも百万倍もすぐれて、大切なことであり、有り難いことであるといえます。

なぜならば末法には本果妙といひまして、修行を完成させて煩惱を断じつくした完全無欠の仏様は、我々とは無縁の仏様なのです。こういう仏様は仏界という高い境界から衆生を救うというエリート主義の救済方法ですから、我々衆生のように理想や向上心のないものには力が及ばないわけです。そこで、末法においては

衆生（九界）の立場から衆生と共に悩み苦しみ、衆生と共に仏道をめざそうという因位の立場の修行者（菩薩）こそ、衆生に身近かな導師であるということから、末法において法華經の修行者が重視されるわけです。

大聖人様はご自身のことを、信者とか学者とは仰せにならないで、常に法華經の行者と仰せになっておられる。これは法華經というものが、単なる理法や經典として、宇宙の一部にあたり、寺院の中に存在しているのではない。法華經は、一個の人格を通して人の振る舞いとして、人間の生きる力として働いてくるところに最も重要な意味があるということです。

また大聖人様は、不輕菩薩という法華經の行者のあり方になぞらえて、ご自身もまた不輕菩薩の跡を踏襲しているのだとも仰せられております。この不輕菩薩とは、釈尊の過去世の時代における修行の姿なのですが、この修行者は、すべての人々は皆な仏になる尊い仏性を持っているんだということで、あらゆる人々を礼拝合掌して歩いた方です。どんな 賤しい人でも、また自分に怨をなす人でも、すべての人を尊く大切に思うということを実行され、一切衆生に対する無限の慈悲の振る舞い、それを我々に示されたのが不輕菩薩なのです。

そして大聖人様は、この不輕菩薩の仏道修行の方法を、唱題行に置き換えられました。一切衆生の仏性とは南無妙法蓮華經のことですから、日々唱題行を続けることは、とりもなおさず、一切衆生の仏性を礼拝していることになるのです。その精神が自分の身にも備わって、日常の行動が無条件の人間愛によって裏打ちされているか否かが、正信と邪信の分かれ道だと言えるのではないのでしょうか。そこを「教主釈尊の本懐は人の振る舞いにて候」

（全一一七四頁）と言われているのです。

いろいろな宗教がありますが、一番大切なことは、その人の振る舞いの根底に、一切衆生に対する限りない慈悲の心というものがあるか否かということで、そうでなければ自己中心的な妄想や慢心にすぎなくなってしまうのであります。学会や宗門のように他人を敵視し、自分たちだけの僥倖を願い、人の不幸をあざ笑うような信仰は決して法華經の信仰とはいえません。「撰時抄」に、

「法華經の一念三千と申す大事の法門はこれなり。……十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば、仏は世にいでさせ給う」

（全集二八八頁）

とありますが、相如是とはつまり人の姿です。現に彼らが非常に独善的で、閉鎖的な集団になりさがっていることは、法華經の信仰をはき違えているところから起るのであります。

結局、法華經の信仰は色読（身で読む）にあり、その人の何気ない日常の振る舞いに表われたところが肝心なのです。そして、それを最も模範的に示された方が、日蓮大聖人なのです。

仏様の慈悲の心、一切衆生を平等に思う心、強い忍耐心を持つた心、それらを人間性において実現してこそ法華經の行者なのです。

《同苦の精神》

日蓮大聖人のお振る舞いを、その深い内面的動機を見ずに、ただ皮相的に他宗を強く批判、攻撃されるところだけを取り上げて、大聖人様は排他的、攻撃的だとの受けとめ方をする世間の学者もおります。また門下の中にもわざわざ自説に固執して攻撃

的な姿をとる人々もおります。今日蓮いまだちれん氣取りで、他人の批判を専らに、盛んに自己宣伝をくり返すのがさも日蓮大聖人の精神であるかのように、しかしこれらは、



戦闘的な大聖人をイメージさせる立像

大聖人様の皮相的な側面のみを見ているのであり、その内面に流れる大聖人様は一切衆生に対する深い慈愛の心にとまたく気づいていないのであります。大聖人様の時代には、「立正安国論」にもあるように、地震が起こったり、疫病が流行したり不幸なことが次々と起こっていました。これらの自然の災厄や社会的矛盾に対して大聖人様は、何故この様な悲惨な不幸が起こるのであるのかと、その原因に疑問を持たれて、なんとかこれらの苦しみから人々を救いたいと考えられたことが出発点となった。このように、もともとは一切衆生を救わんとするご一念にあったのです。

拝読しました御書にも、

「日本国をたすけんがためとをむひしゆへなり」(一三二五頁)とあり、これが大聖人様の行動の原点なのです。最初は逡巡しゅんじゆんもあつたことでしょうが、ついには思い切つてご自身の身命を捨てて法華經を行じていこうと決心されたのです。

「開目抄」においても、その当時の大聖人様の心の揺れを表現

されておられますが、思い切つたからにはご自身の命を惜しまれたことなど一度もなかったことがはっきりうかがわれます。やはり、一切衆生の苦しみの声、悲しみの声がまったく他人事ではなく、ご自身のこととして響いてきたからです。

「諫曉八幡抄」には、

「一切衆生の同一苦は悉く是れ日蓮一人の苦と申すべし」

(全集五八七頁)

と申され、大聖人様はすべての人々の苦しみ、悩み、悲しみを日蓮大聖人の一人の苦として引き受けられたのです。人々を濟度するには法華經以外にないのご決意が、大聖人様の行動の原点になっているのです。

たとえば国府尼や、阿仏房、四条金吾さん、あるいは上野殿の母尼に対してお手紙などに、非常に情のこもったものがたくさん残されております。これらのご消息に現れた大聖人様は、本当に他人のことにそこまで共感できるのかと思うほど深い慈愛と細やかな人情味にあふれたものであり、けして紋切り型の理屈だけを並べたものとは違っているのであります。まるで生きた日蓮大聖人が、そこから語りかけてくるのが聞こえるような、熱い血の通つたお手紙であります。

また、大聖人様の佐渡の滞在はわずか二年の間でしたが、その間に帰依した国府入道や阿仏房夫妻など、国中が怨む悪僧を世間の風評に惑わされずに、信仰され、身をもって仕えられた。そのこと自体やはり、大聖人という人のお振る舞いを考えないわけにはいかなのであります。佐渡から帰られて身延に入られ、二度と会うことのなかった尼や人々に、

「日蓮をこいしくをはしせば、常にいつる日、ゆうべにいつる

月ををがませ給え。いつとなく日月にかけをうかぶる身なり、また、後生には靈山浄土にまいるあひまひらせん」

(全集一三二五頁)

と語りかける大聖人様のお言葉に、深い人間愛といえますか、他者への同感共鳴のお心を味わいたいと思うのであります。

寿量品の最後に、

「毎事作是念 以何令衆生 得人無上道 速成就仏身」

とあります。これは、仏様はなんとかして一切衆生を自分と同じ境地に入らせたいと念ぜられている、との意味が表わされているのですが、この慈悲の精神は、日蓮大聖人において実現されているものと思うのです。

《己を忘れて他を利する》

大抵の場合、人間のエゴというものは大変強いものですから、自分だけが何故苦しんだり悲しんだりしなければならぬのか、という気持ちに先にたちますが、本当はそれではいけないのではないでしょう。

もし自身の境界が深まってまいりましたならば、本当は他人の苦しみや悲しみがだんだん分かってこなければならぬのです。それはちょうど子供が成長して親になるようなものなのです。子供は大抵自分のことしか考えておりませんから、自分の気に入らないことが起これば人を逆恨みしたり親を恨んだりします。しかし親の側は子供がだだをこねようと親を逆恨みしようとじっと我慢もし、また子供が成長してくれるようにと念じて見守っているのです。それと同じように仏様は衆生を同じように見守り、哀愍同苦されておられる。その上で自身のことを省みず何とかして法

華経を持たせ、どうにかして仏様の道に入らせようと願っておいでになるのです。

そういうことが日蓮大聖人の一人の人格の上において、また一代の生涯において、実現されていると思うのです。

伝教大師は慈悲心のことを、

「己を忘れて他を利する」

と説かれましたが、人の痛み苦しみが我がこととして、自分のことを忘れて奮闘する、この精神こそが法華経を實踐する上での規範となるのです。

日蓮大聖人のお姿は、まさしく不自惜身命のご一生でありました。己を忘れ、名聞名利を忘れて、命さえも捨てて、生涯一切衆生に法華経を受持せしめようとされていたことは、事実が物語っているところです。

仏法は、一人の人を大切にするという慈悲の心が根本です。この基本を見失った時から宗教は邪教となつて世の中に害毒を流し、ひいては地獄を現出するのではないでしょう。

本当の宗教とは目の前の一人の人を大切にするという不輕菩薩の精神を基本とし、この精神が広がることによって、社会的にも立正安国が実現するのであります。

末法という人心の荒廃した今の時代に、三大秘法の仏法を持って、世に広宣流布していかなくてはならない理由が、そこにあるのだと思います。

私たちは煩惱の闇が深い存在ではありますが、お題目を持つことによって、何とかそれを克服していかなければなりません。一身に唱題し、大聖人様の慈悲心に境智冥合していけるように、今後のご精進をお願いする次第です。

(文責速記者)

ちよつと寄り道⑥

ネット仲間

伯耆の里 もりたかんどろ

私の記憶ちがい、勘違いでなければ、

国鉄がJRに変わり、電電公社がNTTになったのは、パソコンをはじめから一年ほどたったころ、昭和六十二年だったような気がする。JRはともかく、NTTの方はパソコンと多少関係がある。というのも、これも素人の勝手な推測だが、そのころ通信関係の規制が緩和されたのではないかと思っている。雨後の竹の子のように、パソコン通信のネットというものが次々と誕生したからである。その年、大手のPC-VANやニフティサーブはもとより、この小さな町にもローカルネットが三つも誕生した。

パソコンを手にしたが、使い勝手が今一つわからない私は、だれか精しい人が

近くにいないかと探していたところ、たまたまパソコン通信のネット開局準備中のメンバーと知り合った。この面々がパソコンのつわものぞろい。じつによく知っている。これはいい師匠筋にめぐり会えた、私も事務局としてそのネットの運営に一枚加わった。

さて、そのネットを開局してみると、片田舎にもパソコンをしている人がたくさんいることがわかった。ネットにもさまざまな業種の人が名を連ねた。プログラマやコンピュータ部品を作っている会社の社員やNTTの社員などその筋の専門家から、学校の先生、銀行員、建築屋、機械工、自営業など、パソコン愛好家が幅広く入会した。変わり種は警察官だろうか。むろん私もその最右翼だ。

パソコン通信は電話回線を通じてパソコンからの情報のやりとりをする。が、パソコンの画面上だけのつき合いでは物足りなくなつて、どこのネットでもオフ

ライン・ミーティングと称して、直接メンバーが一堂に会することがある。単なるおしゃべりの会のときもあれば飲み会になるときもある。

事務局を引き受けた関係からか、いつしか例会の会場がうちに定着した。そのうちにパソコン勉強会と称して、毎週水曜日の午後八時ごろから、三々五々メンバーが集まる。一太郎とかMS-DOSとか、各人得意の分野のわか講師になって高説をぶつ。好き者同士が集まるわけだから、話がはずんで深夜におよぶことと再々であった。狭い部屋に十数人が一台のパソコンを囲む姿は、それでも一年ほど続いたであろうか。

けだしこの期間、会場提供者の強みで数人の家庭教師を抱えたようなものである。わからないことは一から嘯んでくだいて教えてもらえたから、パソコン理解は一気に進んだ。そして、はからずも、幅広い異業種間交流の実も進んだ。

一般に古文書というと、課税の対象として土地の品質、面積、石高、作人などを記した「検地帳」や、田畑を譲った証明としての「譲り渡し証文」、さらには現在の戸籍にあたる「宗門人別帳」などをいう。これらの古文書は地方文書と呼ばれ、東大史料編纂所から郷土史家まで、幅広く解読をする人と場所がある。

しかし興風談所で対象とするのは、仏

天地つかの間

〔その六〕

成田 詳道

教古文書であり、中でも大聖人に関連する文書と、内容がかなり限定されてくる。しかも仏教用語は各宗派によって読み方も違えば、意味内容も微妙に異なることがある。さらには経文や地名・人名にいたっては、部外者ではほとんど解読不可能である。たとえば当家なら、日興をニッコウと読むが、他門では多くニチコウと読む。逆に真言宗のお墓などでみる

梵字は、あまり縁のない私たちには難解な文字といえる。

また、ナメクジがはったあとのような草書体の文字も、よくみるとその人の書きグセがあり、その特徴をとらえれば解読作業はすすむ。大聖人とほぼ同時代に、



興風談所の勉強会で（右端が古川師）

奈良の東大寺管長を務めた宗性がいる。ソウショウと読むが、法華経に関する書物の写本が莫大にあり、東大寺図書館にその真跡本がたくさん収納されている。この人の文字など、まるで記号のようで、最初はこんなものが読めるだろうかと思

安に思った。

この宗性の文書に、何か大聖人に関する文献がありはしないかと、ツテを求めて何度も図書館に日参した。初めはあまり相手にもされなかったが、やがて古川伯道師が東大寺の近くに移り住み、その意欲にほだされてか、胸襟を開いてくれたようだ。今ではかなり便宜をはかってくれるという。

先ごろ判明したことだが、橋本円子氏は東大寺図書館長とは従兄弟に当るようで、必要とあらば何時でも紹介しますとの助言をいただいた。あらためて世の中は広いようで狭いことを痛感した。そうと分かっていたら、これ以上に確実なツテはなく、伯道師も先輩から東大寺の坊さんになったのか、などと冗談を言われずに済んだものと、思わず苦笑いがでた。

しかし、そんな紆余曲折をへたが、今では天台宗全書の出版にも、興風談所の古文書解読が一役買っており、暗黒の中期解明に一筋の光明となっている。この功徳は宗派を越えて、後代を利益するものと確信する。

（源立寺執事）

慶びに沸く講員集う

本堂修復記念法要並びに
第二十五回源立寺法華講總會
開催される



阪神大震災によって被害を受けていた、本堂の修復がほぼ完成した七月十六日（日）、午後一時から源立寺本堂において「本堂修復記念法要並びに第二十五回源立寺法華講總會」が晴れやかに開催されました。

先ず本堂修復記念法要は、一時丁度に住職が出仕。献膳・誦経・唱題と如法に厳修された後、修復委員会副委員長新田清治さんの経過報告、修復委員会会計担当の山田吉昭さんの特別会計報告がなされ、題目三唱をもって法要の部は終了しました。

引き続き、法華講總會は、武政佳且さん・中澤千代さんの司会進行により開会されました。

総会は、先ず中澤さんの開会の辞に続き、成田詳道師の唱導によって「聖訓奉唱がなされた後、北村忠雄さんの活動報告、太田勲さんの会計報告、松井照雄さんの監査報告と進みました。

更に、少年部コーラスの「子どもの世界」等のかわいい歌声に続いて、「正信に生きる」のテーマで、壮年部の平井勝男さんのユーモアたっぷりの所感発表、講頭挨拶の後、住職指導へと移りました。

この中で住職は、我々の本堂がこのような立派になったのは、物心両面に亘る源立寺内外の皆さん方の無二の志の結晶であると述べ、この大震災を通して、信心を通じて本堂の精神的な絆が講員との間に実感できたことと結ばれた。

盛会だった総会は、最後に福田一晃さんの閉会の辞をもって、無事終了しました。

本堂修復法要

経過報告

修復委員会副委員長 新田 清 治



ましたので、ひとまず大御本尊様にご奉告申し上げ、かたがた檀信徒の皆様にご披露すべく本日の法要を執り行った次第であります。

源立寺は明治十年に長柄から現在地に移転しましたが、講中が百軒足らずの小さな寺で、法燈をお守りするのも大変だったようです。しかし少数でも熱心な方が多く、さかんに布教して、丹波興福寺、川西教会、滝野大蓮寺、能勢広基寺などいずれも源立寺の関係僧侶が布教して開いたものだと伺っております。

また、檀家同士は非常に家族的なつきあいで、先祖は何事もお寺を大切にして子孫に信心を伝えてきたのであります。

戦時中はいづれもご多分に漏れず大変な時代でしたが、秦俊明住職が亡くなら

れた後、一時住職が決まらず、堺本伝寺の細井精道師、後の日達上人が兼務していた時期もありました。

戦後になりまして昭和三十二年、浅井広竜師の代に本堂を再建しましたが、大変狭かったため、その後間もなく昭和三十五年、高玉広応師の代にかわって、本堂・庫裏新築の議がおこり、中堂氏を建設委員長とし山田氏と私が副委員長を仰せつかり、総額九百万の資金で三十七年に完成したのが現在の建物であります。

当時は創価学会が急成長していた頃でしたが、学会からは直接供養を受けず、本山の補助金と百所帯余りの法華講だけで寺院の新築をしようということで、資金的な面ではずいぶん苦心いたしました。

また戦後復興の物資不足の時代ですから充分な材料も手当てできず、最終的には予算不足のため設計変更をくりかえし、古材や瓦など使えるものは使い、削れるところは全部削って、ようやく落慶式にこぎつけたものです。

その後、代々のご住職もいろいろ補修

源立寺修復委員会副委員長新田でございます。ご指名により経過報告をさせていただきます。

本日は源立寺の本堂がかくも立派に修復できました、まことにおめでとうございます。修復事業はこのあと年内いっばい続きますが、本堂がほぼ完成に近づき

を加えて来られましたが、いかんせん三十数年たって大屋根の耐用年数が過ぎ、雨漏りがひどく、屋根の葺き替えが懸案となっていたことは周知の通りであります。

そこへ一月十七日、降って涌いたような阪神大震災が起こったのであります。ただでさえ老朽化していた建物ですから、被災は免れませんでした。しかし屋根瓦が崩れこせしましたが基礎や建物の構造にはほとんど被害をうけていなかったことは不幸中の幸いでした。

震災当初は通信・交通が混乱してすぐには動きがとれませんでした。一月も末になって、ようやく講中全体の安否の連絡がとれ、人的被害の無かったことが確認されました。

そこで一月二十八日、臨時の講頭、副講頭、総代会が召集され、席上源立寺修復委員会が設けられ、住職の指導のもと、当委員会を中心に修復方法の検討、資金の調達について実行していくことになりました。

地震の被害そのものは軽微であっても、本堂・庫裏・山門・塀など全体に及んでおり、総額四千万以上の経費がかかるため、趣意書をもって皆様に特別の御供養をお願いすることに決しました。

ところが、多くの方から篤いお志が寄せられ、総計八千万以上の資金が調達できまして、これらの修理が一遍にできることになったのであります。

ちなみに本堂の瓦は飛鳥瓦の最高のもので使用、屋根の小屋根もほとんど新しくなり、天井は折り上げ格子天井に張り替え、ご覧の通り新築同様の本堂が出来る上がりつつあります。

この間の経過につきましては、逐一『惠日』にて発表しておりますので、ここでは省略しますが、ただ一言申し添えたいことは、募財の金額はこのあと会計担当の山田さんから正式に報告がございますが、多くの皆様の有形無形のお志の集積の上にこの事業が進められていること、また不思議に良い施工業者に恵まれました、予想以上に立派に修復できたこと

とであります。

今回の大震災では当地でも多くの寺社が被災しておりますが、源立寺はその中でもいちばん早く、しかも従来よりも立派な修復ができましたことは、ひとえに皆様の信心の賜物とご本尊様のご加護によるものと思えます。

このあとの予定は、七月末までに本堂・庫裏の修復工事は完了しまして、引き続き山門・塀・トイレ等の改修に入り、すべての工事が終わるのは十一月頃になるかと思えます。一切の事業が完成しましたら改めて落慶式を行い、盛大にお祝いしたいと思えますので、どうぞその時を楽しみに、また信心と家業に精進して行きたいと思えます。

今後は、この立派になった道場を中心に、一層信心に励んでいかれますことをお祈りしまして、経過報告といたします。



所感発表

正信に生きる

壮年部 平井勝男



本堂修復記念法要並びに第二十五回法華講総会まことにおめでとうございます。

ただいまご紹介いただきました服部地区の平井勝男でございます。今日、このような記念すべき日に、私のような見通りの若輩者がお話しさせていただきましたことを、先に感謝させていただきます、重ねて本日にふさわしいお話ができませんことを、お詫び申し上げてお許し願いたいと思います。

また、今回、講頭様・副講頭様方、そして役員の皆様には、数々のお世話をいただき本当にありがとうございます。特に、企画の榎本真弓さんには、今回私にお話の機会を与えていただき、色々ご指導いただきました。ハラハラされてい

ると思いますが、決して心配いりません。最後までハラハラしてして下さい。

今回の話のテーマは「正信に生きる」ということで、これについて話をするようにと依頼がございましたが、実は私、「正信」という言葉は、初めて聞く言葉でありましたから、「正信に生きる」なんて、教学もない、御書も読んだこともなく、大体家にもない私には、絶対語れないなあと思っておりました。

しかし、こんな私ですが、お世話をいただいた榎本さんからお借りした資料の中に、常々父・平井年春が申ししていたのと同様の、

「信心に一番大切なことは、〇・〇・〇である。」

という言葉を見つけ、これについてならば私も皆さんに申し上げられるのではないかと思っただ次第です。

この「〇・〇・〇」については、最後にお答えを申し上げますが、先ずは、本日の総会が二十五回目ということでしたので、この「二十五」という数字にまつわること色々調べたところ、「正信に生きる」ということの真髄を見たようなところがありましたのでお話をしたいと思います。

二十五回ということは、二十五年の歴史を刻んだということですが、調べますと、第一回総会が開催された年は、一九七〇年、日本万国博覧会が開催された年であります。

この年から二十五年もかかり、本日に至ったわけですが、二十五の数にこだわってさらに二十五年遡りますと、一九七〇年より二十五年前、これはちょうど一九四五年。五月二十五日には東京大空襲があり、八月六日広島に原爆が投



所感発表をされる平井さん

下され、死者五千人以上を一度に記録し、八月十五日に終戦を迎えた年です。

それから二十五年、復興を合い言葉に私たちの両親や先輩の方々が頑張ってきた。その努力があり、終戦から二十五年後、「人類の進歩と調和」をテーマに万博が開かれました。その年にこの法華講総会も開かれたわけでありす。そしてそれから二十五年。これまた私たちの両親・先輩方の法華講のおける信

心の教えを合い言葉に、住職を中心にこの源立寺を守り作られてこられました。

そして今、痛ましい広島原爆投下以来五十年、終戦五十年目。その年に決して偶然とは言いいくい阪神淡路大震災の悲劇、やはり五千人以上の死者を出し、今度は私たちがあの頃とまったく同じ復興という言葉の口にするわけですが、今の私たちには、先輩方が作り出された法華講源立寺がごさいます。住職が率先垂範で先輩方と作り出されたお寺を、私たちは守るのではなく、作り出されたものを更に、築き上げていかなければいけないと思ひます。

その節目が、この二十五回法華講総会の年ではないかと思ひます。この年から二十五年後、第五十回の総会が開かれる時には、素晴らしい源立寺記念法要が行われるよう、私たち若い者が頑張っているかなくてはいけないと思ひます。私の息子が今五歳、二十五年後はちょうど三十歳。父の今の気持ちとちゃんと引き継い

で貰えるよう法統相續していかなければいけないと考へます。

そこで、先ほどの「〇〇〇〇」ですが、これは生前父がよく私に申していたことでもありますが、

「信心とは信じるものであって、決して願うものではない。」

ということ、これを頭に入れて、信心していくならば、とりもなおさずそれが「正信に生きる」ということになると思うのであります。ですから「正信に生きる」者の心得としては、

「水すめば月うつる……御心は水のごとし信のよは(弱)きはにご(濁)るがごとし、信のいさぎよきはす(澄)めるがごとし」(全集一二六二頁)

の御金言通り、常に清らかな信心を持つことが大切なのではないでしょうか。

私も、今後第五十回の記念総会を目指して邁進していきたいと思ひておりますので、皆さんどうか宜しくお願ひします。ありがとうございました。(服部地区)

講頭挨拶

道場に恥じない信心を

講頭兼修復委員会委員長 尾 林 弘 三



源立寺第二十五回総会おめでとうござ
います。

今年、阪神・淡路大震災で被害にあっ
た源立寺を、このように修復して開催す
ることができましたことは、誠に有り難
いことと感謝する次第です。

先ほど新田総代より修復に関する経過
の報告がありました。皆様のお寺をお



守りする信心の真心をいただき、予定を
上回る募財が寄せられました。それに加
えて正信会各寺院ご住職よりいただいた
お見舞いと、正信会信徒よりの義援金を
いただき、山門及び周辺整備をする目途
が立ちました。

そのために、最初の予定より長期に亘
る工事となり、皆様のお寺参詣には、不
自由をかけることになりましたが、秋の御
会式までには、立派に修復ができること
を見守っていただきたいと思えます。

また、震災では、講員の皆様の中には、
大なり小なりの被害を受けられた方も多
いと思われませんが、幹事会の決定により、
家屋の全壊・半壊の十六世帯には、法華
講よりお見舞いを贈りました。また、正

信会より受け取りました義援金も、先日
お届けいたしました。十分なものではあ
りませんが、有効に使っていただき、一
日も早い復旧に頑張っていたただくことを
願っております。

さて総会の冒頭に、「諸法実相抄」の、
「行学の二道をはげみ候べし。行学た
へなば仏法はあるべからず。我もいた
し人をも教化候へ。行学は信心よりを
こるべく候。力あらば一文一句なりと
もかたらせ給うべし」

(全集一三六一頁)

とのご文を拝読いたしました。

特に、今年の活動方針が、

「青少年を育成し、正信の継承を」
となっております。

このように、お寺が立派に修復できま
したが、それに恥じない私たちの信心の
中身が伴うことが大切です。どうか、皆
様には立派に正信を持ち、自行化他に亘
る信心の一層の精進をお願い致しまして、
私の挨拶と致します。

住職指導

有 供 養 者 福 過 十 号

住 職 菅 野 憲 道



本日は本堂修復記念法要並びに第二十五回法華講総会、誠におめでとうございます。回法華講総会、誠にめでとうございます。

ご覧の通り面目を一新しつつある立派な本堂で、二十五回目の法華講総会が開かれまして、重ね重ねおめでたいことであります。おめでたいというのは、我々の本堂が立派になっておめでとうということもありますが、それ以上にこの度の修復事業について、皆さんがそれぞれに被害を受けて大変な中、しかも不況が長引く時に、法華本門の大御本尊安置の道場の修理のために、無二の志を持って御供養なされた、その結果が立派な本堂となって成就し、これによって多くの功德を積まれことに對し、何よりもおめでとうと申しあげるものであります。宗祖は、

「小善なれども法華經に供養しまいら給いぬれば功德かくのごとし」

（「新池殿御消息」全集一四三頁）

と仰せられて、法華經に供養するもの功德は計り知れないことを申されております。法華經にも、「有供養者福過十号」とあって、供養はわずかなものでも、その志が純粹であれば無量の功德を積んだことになるのであります。ところが、現実にはなかなかこの經文を信じないのであります。「新池御書」にも、

「無益のことに財宝を尽くすに惜しからず、仏法僧にすこしの供養をなすには是れをものうく思う、これただごとにあらず」（全集一四四〇頁）

と申されておりますように、自分の楽しみやの為に惜しげも無く金銭を使うのであ

りますが、仏法のためにはわずかでも惜しい気が起こるのであります。

考えて見れば、ご本尊様に御供養したところで景品があるわけでもないし、御礼の言葉もないのですから、普通の人なら千円のお賽銭でも惜しむのではないでしようか。

それを皆さんは深く仏法を信ずる心から供養された。それも、自分の先祖の供養のためや、自分の願ひ事のご祈念のためではなく、ひとえにご本尊様のためであります。今回の震災にともない、本堂にお寺の事を心配されて、それぞれが自発的に精一杯の御供養を供えられた、その仏法外護の志を起こされたことがめでたいのであります。

ある慎ましい生活をされている方は数万円の御供養の現金書留の中に、見舞状と一緒に屋根瓦の修理方法の新聞の切り抜きを入れてこられ、またある小中学生の姉妹はおこづかいを節約して御供養を届けられ、またある人はお墓を立てる資金を、またある人は老後の蓄えを……と、本当に今回の事業は、文字通り真心のこもった浄かな御供養で行うことが可能になったことです。



かわいらしい歌声を聞かせてくれた少年部コーラス

そのほか、金額には表れておりませんが、震災以来連日のように泥まみれになって作業に当たって下さった方、各種の資材や差し入れを御供養された方、いづれも仏法を供養し外護する心でないものではありません。講中ばかりではありません。瓦礫の撤去作業に大勢で駆けつけてくれた普妙寺さんをはじめ全国の僧俗がいずれも、心配し、それぞれに応分の働きをされたことは、必ずご本尊様ご照覧のことと確信するもので

あります。

つい先日まで、千葉県から一人の大工さんが本堂工事の応援に来ておりまして、お寺に九日間ほど泊っておりました。この人は小湊の蓮生寺の総代をしている小林さんという六十近い年配の人で、聖跡研修旅行に行った時もお世話になったりしておりまして、婦人部の中にはご存じの方もいるかと思えます。この人が天井の工事が遅れて総会に間に合わないと聞いて、忙しい中無償で駆けつけてきてくれたのであります。ちょうど本堂内部の仕事で、毎日題目を唱えもって、若い大工さんと一緒に作業に励んでおりました。その小林さん、一日の仕事が終わって晩酌をやりながらとつとつと語っていました。

「本堂に来て良かった。他のことは持っていないが、これだけはもっていけるから。」

と。まったくその通りであります。

話題は変わりますが、私が当寺に赴任して今年で十七年になります。初めてこの寺に来たときは随分暗くて汚い寺だなあとい

うのが第一印象でした。何しろ昼間外から入って庫裏の玄関をくぐると真っ暗で対応にでた人の顔が分からない。初めて来た人が庫裏の玄関を開けたら、私が白衣で出るわけですから、びっくりして一歩下がる——幽霊と間違えるんじゃないか——。それで本堂の玄関に回ればこれが古い銭湯の入り口みたいなお寺でした。

講中はおっかなそうな古株ばかりで、古い檀家は創価学会ばかり相手してきた報いで横を向いているし、新しく檀徒になった人はいつ離反するか分からないような状態で……。本当にややこしい寺に来たなあというのが率直な印象でした。

前任地の蓮生寺が明るい新寺だっただけに、よけいそう感じたのかもしれませんが、ともかく随分あちらこちら痛んでおりまして、早速本堂の玄関や納骨室を直したものです。しかしこの正信覚醒運動のために、経済的にも、また裁判の關係からお寺の改修については大きく制約され、あちらこちら直したいところは山ほどあるのですが、それも夢のように思っておりました。

またかりに修理の御供養を募るにしても、半強制的になっては仏様が受け取られる淨財とは言い難いし、不純なお金で立派にしても大聖人様は決してお喜びにはならないと考えまして、せめてご宮殿や須彌壇の新調だけでもと時間をかけ手持ちの資金で、特別に御供養を募ることなしにやってきたわけです。

そして屋根の葺き替えについても必要に迫られておりましたから、何とか自力でこゝ一、二年の間に実施しようと準備していた矢先にこの度の震災に遭ったわけです。あとはご承知のようなわけで、結果として思わぬところで長年の悩みが一举に解決することになり、文字通り「災い転じて福となす」

ことになったわけでは



大地震以来、私も修復の為に全く厳しい戦いを強いられておりまして、その陰の部分の分

からない人は「何が辛いするか分からない」なんてあっさりいわれますが、私は建物が立派になったこと自体はそれほど幸福と思っております。

それはなりだけ大きくてあちこち修理に追われるような寺では時間的にも、精神的にも、経済的にも大変な負担を強いられるのでありますから、むしろ小さな寺の方が、手が掛からなくて良いぐらいに思っております。

そうではなく、今年一年修復のために一生懸命やれば、少なくとも建物の修理という悩みから解放されて、僧侶本来の行学に励むことができるのですから、このことがもっともありがたいことでもあります。

そうしてさらにありがたいことは、十七年目に起こったこの地震を通じて、やっと講中の皆さんと、この信心を通じた本当の精神的な絆が実感できたことであります。

ともあれ、不徳にして非力の住職ではありますが、皆様のまごころで立派になったこの本堂から、再び正信覚醒の風を起こし、もって皆様の積まれた功德をいや増すべく

精進したいと思えます。

この秋、修復工事が完了したら盛大にお祝いしましょう。

本日は誠にありがとうございました。

【惠日俳壇】

〔宮下 留代〕

白百合の 如き心で 信の道

災害に めげず建ちし 我が菩提

【訃報】

〔蛭池地区〕

寿正院妙芳信女 七月八日寂

俗名 岸田ヨシ子之霊 行年 七十三歳

謹んでご冥福をお祈りします。

閉会の辞

新たな船出のさきがけとなろう

副講頭 福田一晃



本日は、第二十五回法華講総会が、改装なった新本堂でかくも盛大に開催できましたこと、心より嬉しくお祝い申し上げます。皆さん、誠におめでとございます。

思い起こせばちょうど半年前、一月十七日の早朝に起きた阪神大震災は、結果的には上半期の行事を、すべて中止にさせるほどの災害となりました。死傷者が一人も出なかったことは、不幸中の幸いと言えますが、

いまだに地震の痕跡はいたるところに爪跡を残しております。しかるに、住職の熱意と、皆さんの志と、全国の正信会寺院ならびに法華講の励ましによって、源立寺はこのように道場を荘厳し、第二十五回法華講総会を開催できました。

このうちは更に気持ちを引き締めて、源立寺の改築が全国の正信会のみならず、日蓮正宗の新たな船出のさきがけとなるべく、いっそうの精進を誓いあおうではありませんか。

本日、総会に参加されました皆様には、家に帰りました後もう一度、今日の住職の指導を確認し、さらなる実行を強く望む次第です。これもちまして、閉会の辞とさせて戴きます。



屋根の修復もいよいよ最後の鬼瓦の設置まで進んだ

「秘伝の書」とされるその巻物には一体何が書かれていたのか。江戸の田舎に小さな道場を構えていた日影一念とその弟子、岩蔵と雪丸の秘伝の書をめぐる物語の要旨はこうだ。

病に伏した一念は、ある日自らの死を覚悟し、形見の品と遺言を伝えるため、二人を枕元に呼び、次の遺言を残して静かに息を引き取る。

「この巻物は、わしの遺体と共に土中へ埋めてくれよ」

この一言が若い二人の生き方を変えてしまう。師がことのほか大切にしていた秘伝の巻物は、必ずや自分に伝授されるはずと確信していた岩蔵は、その夜の内にこっそりと持ち出してどこにもなく消えて去る。剣で身を立てるとの夢を抱いていただけに、どうしても秘伝の巻物を手にしたかったのである。

秘伝の巻物が消え、遺言が守れないでいることに氣を揉みながら師を弔った雪丸ではあったが、なぜか岩蔵の行為を憎くむ氣持ちは湧いてこなかった。

秘伝の巻物は、岩蔵が持ち出してから一年余たって江戸で剣の腕を見初められ、道場の後継者と推挙されたことから、雪丸が

読書案内

松田 銘道



池波正太郎 著

『秘伝の声』上・下

新潮社
各九五〇円

守っている元の道場に返された。雪丸は遺言に任せ中味を見ないまま埋葬してしまう。江戸で出世の夢を手にした岩蔵であったが、後継者問題で不満を懐く反対派の謀略によって道場を焼かれ、瀕死の深手を負う。変を聞きつけて駆け付けた雪丸に、巻物は「白紙」であったと言いつ残して、その短い一生を終える。

秘伝の巻物には剣の極意が認められていると思っていた岩蔵は、なぜ何も書かれていなかったのか、その疑念を最後まで持ち続けていたが、雪丸は白紙であったと聞いても、一向に気に止めず、師が示した生き方をただひたすら生き続けようと願うのであった。

評論家の鶴見俊輔氏は、この物語の「秘伝の巻物」について、「それこそ、現実にあった剣の極意であり、教養の極意でもあるのではないか」(『H・4・18「朝日」』)と評した。

名声ばかりを求め続ける現代社会に警鐘を鳴らすこの書は、法主の権威ばかりをちらつかせる宗門にも一撃を与えてくれそうだ。彼らは、信仰の極意が白紙(無二の心)にあるとは、一向に氣付いていない。

(正覚院主管)



大リーグの球宴に先発した野茂を応援するファン

編集後記

▼アメリカ大リーグ・オールスター戦で栄えある先発のマウ

ンドに立った野茂英雄投手の力投には、素直に拍手を送りたいと思います。野球発祥の地での「夢の夢」といわれる球宴での大活躍なのですから……。▼年初めから阪神大震災、地下鉄サリン事件、景気の停滞感など、暗いニュースが続いていた日本にとっては、久しぶりに胸のすく快挙でした。▼その活躍を報じるテレビニュースを見ていて感じたのが、野茂

投手が投げる一球一球に、手に汗握りながら釘付けになっていた人の多さです。なんのわだかまりもなく多くの人が、心一つにして応援している姿が自分には印象的でした。▼先日来、日興上人のご本尊様を所蔵する寺院十余箇寺ほどを、まわる機会に恵まれたのですが、同じく日興上人の弟子、また日蓮大聖人の弟子といひながら、それら所蔵寺院の宗派はばらばらに分裂しているのが現状でした。その時以来、各々が自らのセクトにこだわり続けるのではなく、日興上人の、また日蓮大聖人の教えに素直に回帰することしか解決する道がないのではないかと、などと考えていたからでした。それゆえ、改めて野茂投手の活躍と、それをなんのわだかまりもなく応援している観衆の姿に、その感を一層強くしたのでした。▼一方、野茂投手の明るい話題と時を同じくして、源立寺の方にも目を向けると、ほぼ本堂の修復が成るなど、明るい方向に向っていることに気が付いたりします。そんな明るい話題に、今年後半は以外にいいことが続くかもしれないぞ、などと思っている今日この頃です。(大谷)

【葉月詠草】

〔坂本 フミ子〕

夕月は ひとしほ想はゆ 亡き父の

吹きし尺八 かそかに聴こゆ

ほっくりと 芋煮含めて 秋の夜を

亡母の温もり 想ひ出しをり

〔橋本 義一〕

詩ごころ ひたすらたすね 求むれど

幼き頃の つかめざる虹

ペダル踏む 野道を横切る 蛇悠々

急ブレーキに われも助かる

〔橋本 円子〕

引越貧乏 これが最後と 決めし家へ

子ら協力して 迎えくれたる

五十路なる 娘を失いし 旧友に

言葉返せず 受話器を置きぬ





八月の行事



一日(火) 午後二時 お経日(講話)

六日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会

七日(月) 午後二時 広基寺お講

棚経廻り開始

十三日(日) 午後一時 お講・役員会

十五日(火) 午後一時 孟蘭盆会法要

墓地清掃のお知らせ

八月六日(日) 講中勤行会終了後(午前九時頃)、境内墓地の清掃を行いますので、源立寺墓地を利用されているお宅は、必ずお一人は参加ください。

南近畿青年部夏期研修会参加者募集

「青少年を育成し正信の継承を」をスローガンに、教区青年部員の交流と、お互いの信心向上をめざした研修会が、左記のように開かれますので、初信者も気軽に参加下さい。

初日は妙海寺本堂にて坂口麗道・高森伸道・岩島詔行の三師の講義、妙海寺青年部の研究発表等があり、夜は妙海寺に男子、妙音寺に女子が宿泊します。翌日は片男波海水浴場にてリクレーションも計画し、現地解散となります。

なお、申し込みは源立寺まで(〆切は八月十五日)お願いします。

記

日時 平成七年八月二十六日(土)・二十七日(日)

会場 妙海寺/妙音寺(二十六日午後三時に妙海寺に集合)

会費 一泊二日 二〇〇〇円(宿泊しない時は半額)

恵日

平成七年八月号 通巻六号
平成七年八月一日発行

編集兼 発行人 菅野憲道

発行 恵日編集室

〒五六三 池田市槻木町一―一〇 源立寺内
☎(〇七二七)五―一三三三五
購読料 定価一〇〇円(〒別)